

〈論文〉

## ユタ(民間信仰職能者)のハンジ場面におけるナラティブ分析

—ユタと依頼者のやりとり分析のための作業仮説—

山入端津由・井村弘子・泊 真児

### 1 はじめに

沖縄では、人々がユタのヤー(家)へ出向くことを、「ハンジとらしてくる」、「ハンジ買いに行く」、「ユタ買いに行く」という。ハンジはユタのヤーの神棚のある座敷でとってもらるのが一般的である。もちろん、ハンジをとらすには、だいたい三千円の料金が必要である。この金額は40数年前も現在もあまり変わらない。

ユタのヤーは、看板がないので、だれもが簡単に見つけることができない。ユタのヤーの所在は、口コミで探すしかない。ユタを買った経験者に聞いて、人々はユタのヤーをたずねる。したがって、口コミ情報として、ユタの評判は大事である。口コミの内容は、例えばグンスグトゥ(祖先のこと)をよくだすとか、ミーグソー(死後まもなくの死者のこと)が専門などと伝えられる。いわば、どのユタがどのようなハンジ課題に長けているかという依頼者たちの評価である。人々は、いわゆるその「専門性」に応じて依頼するユタを選び、ユタのヤーをたずねる。

ユタを買う人のことは、「ユタコーヤー(ユタを買う人)」と称される。この名称には、多少、差別的な意味合いがある。つまり、「迷信深い」「惑わされやすい」などの意味が含まれている。当然であるが、われわれはユタのヤーをたずねる人々をこのような意味で論ずるつもりは毛頭ない。

さて、ユタをたずねる人々はいったいどの程度いるのか。沖縄県の新聞社「琉球新報社」が5年ごとに実施している県民意識調査の直近の資料がある(2012年元旦の「琉球新報」)。「あなたはユタへ悩み事を相談しますか」という質問に県民サンプルの回答結果は、「よく相談する(2.3パーセント)」「たまに相談する(14.6パーセント)」「あまり相談しない(18.3パーセント)」「全く相談しない(60.5パーセント)」「わからない(4.3パーセント)」であった。およそ6割の調査協力者がユタの利用を否定し、これはここ10年間であまり変わらなかった、と解説されている。ちなみに30代以下ではユタへ相談しない割合がより大きかったという。

沖縄県全体における実際のユタ利用者数はわからない。社会心理学の立場から、大橋英寿(1998)は、1980年に沖縄県本島北部の中心地、名護市(旧羽地村)在住の女性たちに個別訪問による質問紙調査を実施した。主婦がどのような経緯でユタにかかわるのかという「主婦の社会化」の調査で、研究協力者の女性たちにユタのヤーへ出向いたかどうかを問うている。結果、269名の女性のうち、161名(約60パーセント)がユタをたずねていた。しかも、ユタをたずねたことのある女性を既婚と未婚に分けると、64パーセン

トは既婚者であった。年代別でみると、5, 60代の主婦の85パーセントがユタをたずねていた。また、この調査で女性によるユタの活用頻度もたずねているが、年におよそ2.3回にわたりユタを買っている人が多かった。

では、実際に、ユタのヤーにはどのくらいの人々が来ているのか。1978年当時に大橋が収集した貴重なデータがある。名護市在住で、当時63歳のHSユタ（女性）がハンジを行う際に依頼者の住所、家族成員の生まれ年を記載した帳簿である。これによれば、一日の来客数は、多いときで23人であった。平均で一日に約9人の来客があり、月単位では、約270人が来訪していた。なお、この数値は、ユタ一般というよりは、いわゆる売れっ子ユタの例と見た方がよい。ちなみに、2008年にHSユタ宅に調査に向いたところ、日中、客は一人も居なかった。同行した知人がハンジをとってもらったところ、5千円のハンジ料を請求された。かつてと違うこのような状況は、ユタの霊力がハゲルといわれるような現象を呈していた。いずれにせよ、今日、果たして、ユタのヤーに出向く人はどのくらいいるのか。その数は、増えているのか、あるいは減っているのか。確認できる資料はない。

## 2 人々がユタのヤーへ出向く理由

ユタのヤーへ人々が出向くのは、どのような理由からか。一体、どのような思いを抱いて人々はユタのヤーへ出向くのか。ユタのヤーに出向くことで、依頼者たちは、何を成し遂げようとしているのか。

社会人類学者で沖縄の民間信仰論を展開した饒平名健爾（1972）は、人々がユタに出向く理由を次の7つの領域に分類している。①家族の初運勢、②世帯員の病気の理由の確認、③事業おこしの占い、④建築の風水見の占い、⑤婚姻の相性確認、⑥不連続きの理由確認、⑦旅行占い、などである。しかも、これらに関するハンジ内容は、一般的に祖先ごと（祖先をめぐる諸課題）と関連していることを指摘している。また、文化人類学者のウィリアムP.リブラ（1966）は、人々がユタに出向く理由を、①健康問題の原因確認（約8割を占める）、②夢見の分析（何の予兆か）、③紛失品や金銭関係、④結婚の相性確認、⑤養子関係（継承問題）、⑥元祖事（墓、儀、財産）、⑦家相の選択、⑧極度の経済貧困の原因確認、⑨最近死亡した人との接触、⑩選挙結果の予想、と分類している。さらに、前掲した大橋（1998）は、ユタに出向く動機として、①運勢判断、②結婚相性確認、③旅の安全確認、④出産の安全確認、⑤仕事・受験見通し、⑥家の新改築の時期、⑦屋敷の事、⑧マブイグミ（入魂ウガン）、⑨病気・ケガ、⑩夢、⑪トートーメー（位牌関連）、⑫グァンスゴト（位牌継承など）、⑬スーコー（死者・祖先に関する焼香・儀礼）、⑭墓、⑮ミーグソー、⑯その他、に分類した。そして、その中でも最も多かったのは、ミーグソーで、次に病気・ケガの原因確認が続く、と指摘している。なお、大橋（1986）によれば、この資料は、1975年秋ころから1976年の春に収集した50事例のハンジ場面における観察結果を分析したものである。

人々がユタのヤーに出向くこれらの理由は、依頼者の側からすると、生活世界における日常的な心配事や気がかりな事、または解決すべき課題を表象するものといえる。前記の三名の研究者が示した課題の内容別の分類を、便宜上、まとめると、およそ次の9領域に分類できる。すなわち、①家族成員の運勢、健康問題（病気・事故）・不運な体験（極貧、倒産など）の原因、見立て、②墓や家の建設、家相（屋敷・土地）の風水見の適否、③起業や事業の成否の見立て、④婚姻の相性・判断、⑤祖先事（養子関係、位牌・財産の継承、墓の建立儀礼、法事など）、⑥夢見・予兆の確認、⑦紛失物・行方不明者探し、⑧死者関連（直近の死者の後生での状態確認など）、⑨諸儀礼の遂行と妥当性の確認、である。依頼者側からすると、依頼者がユタのヤーをたずねるのは、これら分類メニューの課題内容のいずれかの解決を求めてのことと仮定することができる。

では、心配事や気がかりなことの、「心配」とは、一体何か。「心配 (worry)」とは、「苦痛な侵入思考やイメージが突然意識の中に入ってくることにより引き起こされるさまざまな障害に幅広く生ずる人の認知プロセス」とされる（エイドリアン・ウエルズ、2006）。「心配」は、また「ネガティブな侵入思考への対処方略として通常引き起こされる」ものである（エイドリアン・ウエルズ、2012）。いわば、「心配」は、機能的にみると、心配することで将来起こりそうな問題を避けるとか、問題に対処する準備である。一般的には、人々の心配事や気がかりなことは、生活世界での規範・倫理に触れる行為や体験に関して生ずるのがほとんどである。それゆえに、ユタのヤーへ人々が出向くのは、こうした「心配」をハンジというユタとのやりとりをとおして解消するためであると仮定できる。われわれの強い関心事は、依頼者がユタとハンジのやりとりをとおして、「心配」の解決・解消へと辿り着く心理過程にある。

ところで、心配事や気がかりなことの解決を求めてユタに出向くのが依頼者だが、ユタも依頼者が困ったことの解決を求めて来ていることを承知している。しかし、ハンジ場面で、依頼者は、ユタに対して直接、心配事の内容を伝えない。一方、ユタもどういうことで来たのかと、直接に問うことはしない。では、ハンジは、どういうやりとりで展開するのか。まず、ユタがある課題を依頼者へ投げかける。投げかけられた課題に対して依頼者が応えるかどうかで、ハンジの展開は決まる。要するにユタは、依頼者がもってきた課題の内容を見立てることができなければ、ハンジ場面で、依頼者とのやりとりを始めることができない。果たして、ユタは、どのようにして依頼者のかかえている課題を見立てるのか。大橋（1986）は、ハンジの開始にあたり、ユタが一方的に依頼者に対してある課題を投げかける点に注目した。大橋によれば、ハンジ場面の観察を行った50事例で、やりとりがなされたトピック（課題）が328件で、そのうちの278件（85パーセント）でユタの側からの投げかけでハンジが始まった。このトピック（課題）が前述した9分類メニューに含まれる課題であるが、ユタは、これらの課題のいずれかを投げかけて依頼者の反応を待つ。一見、これは、依頼者が抱える課題を予見したユタの問いかけとみることもできる。しかし、ユタが投げかけた課題に対して、依頼者が反応しない場合がある。そのためにハ

ンジは展開しない。その際、ユタは、ハンジを展開させるために、依頼者が反応するような別の課題を投げかける。依頼者にとってユタから振られた課題が、自らかかえている課題であれば、本来、問題解決のために来ているので、応えるのは当然といえる。

このような見解に立てば、依頼者に対してユタが一方向的に課題を振るのは、依頼者の心配事を見立てるためであると考えられる。そして、ユタが見立てて振った課題が依頼者の有している課題とフィットすれば、依頼者がこれに応答し、双方でハンジのやりとりが始まる。双方でのハンジのやりとりができるには、ユタと依頼者の両者が互いに共有できる前記したような分類メニューをもっているからと考えられる。実は、ハンジ場面でのユタの語りは、ユタが精霊と交渉ができる能力を有すると依頼者に信じられているがゆえに、ハンジとしての意味をなすものである（饒平名、1972；饒平名、1986）。本来、ハンジ場面でのユタと依頼者の課題当てとでもいえるようなやりとりは、両者が共有する呪術的な信仰を背景に理解できると思われる。今回、この点については、ひとまず置いた上で、われわれは、ユター依頼者のハンジのやりとり・展開過程に焦点を当てつつ、依頼者が自らの心配事をユタのハンジを用いてどのように整理・納得し、解決へと至るのか、という視点からそのハンジ過程について検討した。

### 3 ハンジ過程の分析のための作業仮説

ユタのヤーでは、ユタと依頼者がどのようにハンジを展開するか。大橋（1988）は、参与観察によるハンジ場面の詳細な記述を行った。そして、ハンジを観察した後に、その依頼者の自宅へ出向き、ハンジに関する依頼者の振り返りやハンジの内容の評価・感想を含めての追跡調査を行い、その結果を踏まえてハンジ過程を分析した。こうした調査手法により、ユタを活用する依頼者の視点からユタのハンジ過程を検討することができるようになった。結果、ユタのヤーにおける多様なハンジ場面の記録や依頼者の振り返り記録から、依頼者の抱える心配事や気がかりなことの具体的な内容が、ハンジというユタと依頼者双方のやりとりをとおして、整理され、意味づけられ、両者に共有されるという、問題解決過程が明らかにされた。同時にユタにより、伝統儀礼による問題解決への道筋が描かれ、依頼者がこれらの儀礼を選択的に執行することで解決に至ることが示された。

では、ハンジ場面において依頼者の持ち込んだ課題がユタとのやりとり過程で、整理され、意味づけられ、共有されるとは、いったいどういうことなのか。このことを分析する上で、やはり作業仮説を設定する必要がある。つまり、(1)ハンジ場面でユタは、依頼者に対して、どのような課題を振るのか、(2)依頼者は、振られた課題に対し、どのような理由から応じているのか、(3)先の(1)と(2)のようなやりとりをとおして、ユタと依頼者は、その課題に対してどのような道筋で折り合いをつけるのか、(4)ユタと依頼者が折り合いをつけて共有できた道筋の意味するものは何か、が明らかにされればよいと考える。このような作業仮説について、大橋（1988）が報告した一人のユタと三名の依頼者のそれぞれのハンジ過程に関する記述をとおして説明する。

各事例のハンジ場面で、ユタが依頼者に対して、住所、家族成員の生まれ年（干支）、夫のきょうだい関係、位牌の有無などをたずねることからハンジのやりとりが始まる。唐突に、ユタは具体的な課題を依頼者へ投げかける。ユタは、ハンジの際に依頼者に対して来訪した理由、すなわち心配事や気がかりなことを具体的に直接、問わないのが一般的であることは、前述したとおりである。同様に、依頼者も、最初から自らかかえている問題をユタに開示することはない。ハンジは、ユタが振る課題を待って、依頼者が応答した時に初めて展開する。ちなみに、ハンジ場面でのやり取りがこのような態様で行われるので、ユタは、依頼者に投げかける多様な課題の分類メニューを有する必要がある。これがなければ、ユタは、依頼者の反応を引き出し、依頼者の心配事や気がかりな内容に関する内容を見立ててハンジを展開していくことができないと思われる。ユタの側からみると、どれだけ多様な分類メニューを有し、このメニューのどのような課題に依頼者が反応しても、ハンジが展開できることが、民間信仰職能者としてのユタ個人の専門領域を特徴づけるものといえる。

大橋による報告事例A（1988、Pp.174-188）についてであるが、この事例で、ユタが最初に「墓の話やった？」と、投げかけ、依頼者から現在かかえている墓に関する心配事が語られて初めて、ユタは依頼者の心配事の内容を認識する。墓の課題についてのやり取りが終わると、次にユタは、「ちょっとつまずいた人いないか、ケガ？」と問う。対する依頼者は、子どもがケガした場所が居住地のカミの道であったことによる心配事の内容を語る。ユタは子どものケガの経緯をここで初めて認識し、カミの通り道ゆえ、カミの衣装に触れて転んだなどと意味づけを行う。そして、ユタは、ケガした子どものマブヤー（人の活力の源とされる魂）が落ちていることを指摘して、マブヤーグミ（魂を込める）儀礼を行なうことをすすめる。

「特別な場所での子どものケガであったので、何かあるのではとの思いがあった」「マブイ（魂）が落ちているのはハンジで知った」と、依頼者は大橋による追跡調査の際に語っている。ハンジで、子どものケガの意味やマブイが落ちていることに納得した依頼者に、ユタは、落ちたマブイを拾い上げるマブイグミ儀礼の仕方を手ほどきした。後日、依頼者は、マブイグミの儀礼を行ったこと、また「気のせいかもしれないが子どもが元気になった」との感想を大橋に述べたとされる。

ハンジでのやり取りは、通常、一人でおおよそ50分程度続くので、一つの課題で終わることはほとんどない。必ず、複数の課題についてやり取りがなされる。この事例では、次に、ユタから一方的に「位牌の配置換え」の件が提示され、これに依頼者が応じてハンジが展開する。ハンジ後の追跡調査で、位牌に祀る人の配置の仕方の問題があるとハンジされたことは、依頼者にとって予期せぬことであったこと、しかし、ユタからハンジが出ているので、そのとおりに行う準備をすすめていることが語られた。

ハンジ場面で、次に、ユタは、「ウスーコー（焼香）延ばしているの（繰り下げ焼香）ある」と、依頼者に問う。期日通りに行うべき焼香の実施日を延ばしているものがあるか、とい

う問いかけであった。ユタは、その後のやりとりでの依頼者の説明を受けて初めて、「繰り上げ焼香（本来の期日の前に焼香を行うこと）」という逆の課題が依頼者の心配事であることを察知する。ユタは、子孫の都合優先で期日前に祖先の供養を行なった依頼者の規範破りを咎める。

大橋の追跡調査で、依頼者は、「夢でぜんぜん（焼香が）とおっていないと見るわけですよ。それでなにかあるね、と思って（ユタのヤーへ）行ってみたら、自分の夢を見たのと（焼香がとおっていないというハンジが）ぴったり合っているわけですよ。しかられたもんだから、マブイグミの日（マブイを取り入れる儀礼の執行の日）に（繰り上げ）焼香のお詫びもやった」と語っている。依頼者の事後説明の内容から、規範破りについて心配していたことがこのハンジと儀礼の執行をとおして解消されたことがうかがえる。

引用したハンジ場面のユタと依頼者のやりとり過程と、ハンジ後の依頼者への追跡調査の結果は、次のことを示唆するものといえる。すなわち依頼者の語る内容からユタが依頼者の心配事や気がかりなことの内容を察知して、これを意味づけた上で、伝統儀礼による対処策が示されるのがハンジである。要するに、ハンジとは、依頼者のかかえる心配事や気がかりなことについて、依頼者がその内容を具体的に語ってはじめて、ユタに心配事の内容が認識される過程であるといえる。そして、ユタは、依頼者の心配事の内容について、道理や意味づけを行い、さらに解決策としての伝統儀礼を示し、これを実施するように指示する。依頼者にとっては、自らの心配事についての思いをユタのハンジという語りをとおして、ユタが示した筋道や意味づけに納得しつつ、確かめていく過程である。

このように理解すると、ユタの振る課題に対して依頼者が語らなければ、ユタは、依頼者のかかえる問題を知ることができず、ハンジは展開しない。とはいえ、ハンジの展開は、ユタの振る課題によってのみ展開するわけではない。ハンジ後、依頼者がまだ相談事があるような表情を察知したユタが、「何か気がかりなことがあるか」とたずねて、依頼者がこれに応えることで新たな課題のハンジが展開する場合もある。また、一応、ハンジ終了後に、新たに依頼者から提示された課題についてハンジが展開される場合もある。大橋の報告事例B（1998、Pp.188-202）や報告事例C（1988、Pp.202-212）には、ユタと依頼者のこうしたハンジの展開態様が認められる（山入端津由・井村弘子、2011）。

さて、依頼者が自らの心配事や気がかりなことの解決を目論んでユタのヤーに出向くとすれば、当然、依頼者は、事前に自らの心配事や気がかりなことについての自分なりの考え方や思いなどを有していると考えられる。また、これらの考え方や思いなどが依頼者に不安を喚起しているといえる。大橋（1998）によれば、このような考え方や思いは、依頼者の心配事についての因果仮説である。もし、依頼者が心配事に関する因果仮説を有してユタのハンジ場面に臨んでいなければ、おそらく依頼者は、ユタから振られた課題に対して選択的に応じることができないであろう。そして、ユタとのやり取りがかみ合わずに、ハンジは展開しないと思われる。このような観点に立って、大橋は、依頼者が自分の心配事に関する仮説を立てて、これが妥当かどうかの検証をユタに依頼し、ユタがこれを検証

しているのがハンジであると述べている。

われわれは、依頼者側の視点から、ハンジ過程をユタによる検証というよりも、ユタの語りをとおした依頼者自らによる検証過程と捉えることができると考えている。つまり、ハンジ場面での依頼者の態度は、より能動的であるとみている。こうした見解に立つと、ユタと依頼者のハンジ過程は、機能的に、依頼者が積極的に自らの仮説をユタのハンジを手がかりに確認・整理したり、修正したりする過程として捉えることができる。大橋による事例Cは、このことを如実に示している。そこで、長い引用となるが、この点について具体的に検討・吟味する。

その際、再度、ハンジ場面を分析する作業仮説について確認しておきたい。まず、ハンジ場面で、(1)ユタは、依頼者に対して、どのような課題を振るのか、(2)依頼者は、振られたどのような課題に対し、どのような理由から応じているのか、(3)振られた課題に応ずるやりとりをとおして、ユタと依頼者は、その課題に対してどのような道筋により折り合いをつけるのか、(4)ユタと依頼者が折り合いをつけて共有できた課題の意味するものは何か、を明らかにするように分析をすすめるということである。なお、(3)は、ハンジの展開後、ユタと依頼者が納得できるような、どのような意味の物語が作られるか、ということである。

付言するに、ハンジ過程の分析は、次のようないくつかの観点からも検討されるべきだと考えている。すなわち、①ユタが依頼者に振る課題に関して、どのような課題を投げかけるかという点からユタのハンジを特徴づけることができるかという観点である。②ユタが一方的にある課題を依頼者に振るといふことの背景にあるものはなにか。ユタは、依頼者にどのような応答を期待してこれらの課題を投げかけているのかも合わせて検討すべきである。なぜなら、ユタは、依頼者に投げかけた課題に対して応答がない場合、投げかけた課題の内容を少し変えながら再三投げかけ続ける場合があるが、これらの意味するものは何か、検討する必要がある。③ユタがハンジ過程で投げかける諸々の課題のメニューは、前述したように便宜上、9分類としたが、そもそもこれらのメニューは、どのような過程を経てユタは修得していくのか。これらはユタがユタとなる成巫過程と密接な関連があるのかどうかも合わせて検討すべき点である。さらに、これらのメニューがユタのどのような宇宙観、社会観、社会的信念、規範意識などを反映したものかも重要な分析課題といえよう。他方、④依頼者が抱く9分類のメニューの諸課題は、やはり依頼者にとって意味をなす民間信仰としての祖先崇拝と密接に関連していると思われる、こうした面からの分析も必要である。なお、今回は、ユタが振った課題へ依頼者が応えることで展開するハンジ過程について、依頼者の側からユタとのやりとり過程を分析することに主眼を置いた。したがって、上記①から④の観点については、立ち入らない。

さて、以下に転載した事例は、大橋の報告事例Cである。ハンジ内容に応じて〈〉内に見出しがつけられているので、これに沿って解説を加える。また、ユタと依頼者のやりとりは、方言で行われている部分が多いが、方言記述と翻訳文のうち、翻訳文のみを転載し

た。なお、このハンジ過程の記録においても前述同様にHSユタのハンジは、通常の導入から始まる。依頼者は、当時、64歳の主婦である。

### 大橋・報告事例C

#### <八代目の祖先について>

ユタ おばあさん、どちらから来られましたか？

依頼者 ○○○です（地名）。

ユタ ○○○？

依頼者 はい。

ユタ （姓名、家族構成、年齢、代数を聞いた後、祭壇に手を合わせ、しばらく目を閉じて、うーん、八代目の家はどこかねー。あなたたちは、いま四代だよ。四代の祖先がね、大祖先にあたる家、八代目のこと、なにか御願のことがあったのかね？結婚式だったのか、お祝いがあったのかねー？八代目の大元屋のことを立派にしてほしいと言っておられる。（「立派にしてほしい」とは、供養をきちんとやってほしいという意味である）

依頼者 （無言）

<ジラーという名の人>

ユタ ジラーとよばれている人がおられたかね？

依頼者 （とまどった表情）

ユタ ジラー、ジルーさー。ジルー、サンダーといってネ。昔の土地（地域）で呼ばれていた名前さー、ジラーという名前、サンダーという名前、ジルーいう人、いらっしやった？

（「童名・わらびな」 「幼名」といわれる人の呼称である。この名前に覚えがないかと問うている）

依頼者 （無言）

ユタ この人尋ねてみなさいね。なにか、ジルーという名の人を立派にしなさいね。たずねて御願あげなさい。そう言っているよ。たずねてみなさいね。（話題の展開を図る際によくみられるハンジの仕方である）

依頼者 ん・・・（反応しない）

このハンジ場面は、ユタの問いかけに依頼者が黙する場面である。とくにめずらしい場面ではない。通常、ハンジ場面において、ユタの語りに対して依頼者が必ず応えるべきルールはない。

転載事例で示されたように、八代目にジラーという人がいなかったか、その人を供養しなさい、そうすることが大切だと、ユタは依頼者に語る。しかし、依頼者は黙っている。そもそも、依頼者がユタのヤーへ出向く際、八代目の祖霊のことは念頭になかった。名前



も知らない祖先について、依頼者は即答できないのである。一代が仮に50年とすると、八代は400年前のことである。代々の系譜があっても、常にこれに強い関心をもっていなければ、依頼者は、この時代の人について知る由もない。とはいえ、依頼者が応えきれないからといって、ユタは、一旦出したハンジでの八代目の人のことを容易に取り下げることはしない。ユタは、名前を少し変え、再三依頼者に問いかけている。しばらくたって、語らぬ依頼者に、ユタは、淡々と、「(家族のだれかに) たずねてみなさい」といって、次のハンジに移っていく。

ユタは、しかし、ハンジとしてあてずっぽうで語っているわけではない。ユタの説明によると、自分のチジガミ（守護霊）が見せてくれることを語るなのであるという。ユタの語りには、それぞれのユタの特徴といえるような観念や思考がある。チジガミはユタ個人によってそれぞれ固有なカミであるからである。例えば、上代から父系血縁相続、特に長男優先相続の規則がきちんとなされているかどうかを正すハンジ領域が得意とすると、「ジラー」という名前の祖先について、依頼者が「祖父母から聞いたことがある」と答えようものなら、八代目の位牌継承の問題へハンジが展開していったことが想像できる。こうした見解に立脚すれば、ハンジの展開は依頼者次第であり、同時にユタから振られる課題そのものが重要となる。それだけに、作業仮説(1)のどんな課題か、(2)の依頼者の反応理由、(3)の双方による道筋（物語）の調整、(4)の道筋の意味、というハンジ理解の作業仮説が必要となる。

#### <門中墓の新築の祈願について>

ユタ なにか屋敷の工事、墓の工事などどこか、兄弟のだれが行ったところありますか？ 建築、工事、修理？

依頼者 あの一、行いました。

ユタ どこ？

依頼者 あのNピキとKピキとって。（「ピキ」は、厳密ではないが、門中という意味に解してもよい）。

ユタ 門中の？

依頼者 もと、門中墓があったんですよ。

ユタ だれがやった？

依頼者 ん、これはあの一。

ユタ Nピキ（の墓）ね？

依頼者 Nピキ（の墓）とKピキ（の墓）と。

ユタ 二カ所全部修理したわけ？

依頼者 自分たちの祖先（の墓）のところで御願をしたところ、墓の上から土砂が落ちていて、もう足の踏み場もなく骨ガメも割れ、埋もれて、そしたらNピキの人がこれは門中の人たちに見せて水を排出させて修繕するかしないか見せて

からでないといけないということで見せたところ、いま修繕しよう、再度崩れるおそれがありますからとそういうところだったのですが。

ユ タ 両方とも？

依頼者 修理してももたないということで、新規に前の方に作りました。

ユ タ その墓（旧墓）のすぐ前に？

依頼者 はい、（旧墓の）庭に。

ユ タ 前に寄せて？

依頼者 （旧墓の）前に庭があったので、新しく（墓を）つくりました。

ユ タ それで、（骨は）どこにまとめたの？

依頼者 （骨瓶の底に）穴があいて、もう骨の区別がつかなくなっていて瓶に残っている骨はそのまま移したんですよ。また、土ごとみんな手ですくって、セメントで瓶・・・。

ユ タ 何名といってわからないわけ？

依頼者 わからない。

ユ タ それで、瓶は大きいのを買ってきて入れたわけ。

依頼者 いや、セメントで・・・。

ユ タ 骨壺、作ったわけ。真ん中に？大きいタンクのようにして？

依頼者 はい。両方用の。

ユ タ それで、入れたわけね？

依頼者 そうです。そうです。

ユ タ それでね、この墓をつくってから、一年の（墓の）誕生祝い、三年のお祝い、七年のお祝い、この年号あげていますか（祝うべき年に祝ったかという意味）

依頼者 一年でね。このNピキの人が一年で、この墓はもう何百年にもなる御骨神（ミフシン）だから、一年で三十三年（まとめて）の御願をやろうと言うたわけ。

ユ タ それで、門中は承知したわけ？

依頼者 ええ。

ユ タ 承知して、一年で三十三年分まで御願したんだね。

依頼者 うん。

ユ タ （厳しい口調で）それはとおらないよ。（三十三年分を一括して御願を行ったのでは、墓の誕生祝いにはなっていない、と咎めている）

依頼者 （同調するように）そうよねー。

ユ タ だったら、誕生祝いにね、誕生祝いから、十三の祝いから四十九、六十一、七十三、八十八まで、九十まで・・・ちょうどこれをひとまとめに御願したことと同じことになるんだよ。それはいけないよー。

依頼者 気がかりしているんですよ。

ユ タ ねー、これはねー、門中が拝む大祖先の墓（旧墓）の代わりにこれ新墓をつくっ

たんだから、つくった年号からとっての工事だから、御願（墓の誕生祝いの）をあげるべきでないか？この祖先たちは、ジーガネ（あの世の土地税）、旧墓では旧墓でのジーガネを納められていたんだよ。あれ（旧墓）を廃して、こっちに移ったよー。場所が違うでしょう。（墓の）向きが同じでも場所が違う。（旧墓の）庭が墓になったんでしょう。庭からジバン（墓という地番）なったでしょう。この年号（墓の誕生日）、こっち（庭だった場所）で（御願を）あげないと（いけないでしょう）。あっち（旧墓）の年号でやっていて、ここ（新墓）のものはあのように（きちんと）すまさないとは。税金（あの世の土地税）がかかるさー。これ（墓の新築）は、喜びだよ、いわばお祝いなんだよ。あなたたちは祝いをしないで済みますの？子々孫々が栄えるよ、お墓をつくったら。

依頼者 五年・・・。

ユタ 祝いなんだよ。

依頼者（墓をつくってから）五年になる。

ユタ 二回分おこなっているさ。誕生日の祝いと、三年の祝い。（そんなことでよいとハンジだしたのは）どこの物知り（ユタ）だったの？（Hユタは、依頼者が別のユタのハンジを買ったことを知っていて、暗にこのユタを非難している。これもユタの一般的な特徴である）。

依頼者（問に答えず）いや、誕生祝いはした。

ユタ 三年（の祝い）がおこなっている。

依頼者 そうです。

ユタ あとの二カ年から七年どー。（あと、二年したら七年のウガンだよ！）

依頼者 そうです。

ユタ 誕生祝いで三十三年の年号（祝い）までやったわけ？

依頼者（問いに答えず）あちらの大墓（旧墓）から移したことが十全になされていないと、（ハンジで）でているんですね。

ユタ おー、おー、おー。当然でるよ、これは。

依頼者 あの、これはまた、本来の墓地にある墓（新墓）へ帰ってくださいといって、あそこの墓地の墓（旧墓）から。だから、本来の墓（新墓）に帰ってくださいという御願をすればよいとおっしゃるのですが、これは、御願すべきことですので、この延びている三年の祝いに一緒に、延び延びになった利息分も御願（新墓の土地のカミへ納めるべき土地税を納めていないことのお詫び）しますといって、あの三年の祝いの御願もいっしょにしましょうね。

ここでのハンジの展開だが、ユタは、「屋敷の工事」「墓の工事」をだれかがやったかと問うている。「建築」「工事」「修理」といったことばは、屋敷や墓に関するハンジの展開

を予期したユタの定番の振り方である。このことに依頼者が反応するかどうかでハンジの展開する方向が決まる。依頼者が「屋敷云々」とくれば、屋敷のカミとの関連で、例えば、「屋敷ウガンがきちんとなされていないので荒れている・・・」と、ユタはハンジを展開するかもしれない。ハンジ場面で、依頼者は、ユタの振りに対して、「行いました」と答える。すかさず「どこの」とユタが問いかける。門中墓の工事と墓の誕生（建築）儀礼に関することが具体的に依頼者から語られて初めて、ユタは、依頼者が墓の建立に関する心配事を解決するためにユタのヤーに来ていることを知る（作業仮説(1)(2)関連）。

ハンジ内容を要約すれば、次のとおりである。山の岩肌をくり抜いて作られたN門中とK門中の二つの門中墓の内部が崩れかかり、骨壺も破損していた。修復困難とみて、同墓の前庭であった広場に新墓を建立し、墓の誕生（建立）祝いを行なった。この点について、ユタは、所定の年号（一年、三年、七年など）に応じて祝いを行うべきであって、一気に三十三年までの祝いをしても成立していないと言う。ここで重要な点は、ユタのこの指摘に対して、依頼者がすかさず、「そうよね」「気がかりしていたんですよ」と、心情を吐露したことである。つまり、依頼者は、都合よく、まとめて墓の誕生日を祝うのは許されない、したがって、「墓の新築祝いは成立していない」という思いが払しょくできず、「夢見の悪さ」は、このことを知らせている、と考えていた。依頼者は、自分の思いが当たっているかどうかを確かめるためにユタを訪ねている。ユタとハンジのやりとりを通して、依頼者は、自分の思いが当たっていると実感する、いわば腑に落ちる体験をしたのである（作業仮説(3)(4)関連）。

ユタは、さらに、祖霊たちは、住んでいる旧墓の土地で税金を払っていて、新墓の土地の帳簿にきちんと登録して土地税を払わないと祖霊たちはいつまで経っても新墓に移れないし、住めない。祖霊たちに登録が遅れたことを詫びた上で、新墓の祝いもきちんとやって、住んでもらうための儀礼を行うべきだ、とユタは強く指摘する。対して、依頼者は、「大墓（旧墓）から（祖先の骨を）移したことが十全になされていないと、（ハンジで）でているんですね」と、ユタの意を汲んで、言い換えを行っている。すかさずユタが満足げに「おー、おー、おー、当然ですよ、これは」と依頼者へ返す。こうしたユタと依頼者のやりとりで共有された一連のハンジは、「墓の移転に伴うあの世での不備な手続きの修復と祖霊への対応」として意味をなす物語である（作業仮説(3)(4)関連）。

なお、注目すべきことは、次のようなユタのハンジに対する依頼者の反応内容である。すなわち、新墓の誕生儀礼の修復儀礼について、ユタが「誕生祝いはしていない」という主張に対して、依頼者は、三十三年まで一括して誕生祝いを行ったのはよくないが、「誕生祝いはした」とこだわりをみせる。これに対して、ユタは、「三年の祝いが遅れていると」返したことに對し、依頼者も「そうです」と折り合いをつけている点である。そして、新しい墓地のカミにきちんと登録して、祖霊にどうぞ新しい墓に帰ってくださいとウガンをする際に、三年祝いのウガンも一緒にやることをユタに伝え、そうした方がよいでしょうねというハンジを得ている。このように、依頼者は、ハンジ過程でユタの語りを単に一方的

に受け入れるのではなく、依頼者なりの考えを通しながら納得のいくように折り合いをつけている。まさに、そういうやりとり過程で、最終的には依頼者が納得できる一連の物語を作るのがハンジである（作業仮説(3)(4)関連）。

大橋によるハンジ後の追跡面談で、依頼者は、NとKの2つの門中の人たちにハンジで得た内容を伝え、納得してもらうために門中の人々らを伴って再度、同ユタを訪れたことを語っている。門中の人々らもハンジ内容を納得し、両門中から多額の費用を拠出してもらい、2日間の儀礼をウガンサー（御願儀礼を執行する職能者）にさせている。そして、その後、同ユタのハンジでウガンが通っているとされ、「安心した」と語ったという。後述するが、ハンジの課題は、大方が人々の生活世界における規範や倫理に触れる行為、体験に伴うものである。そして、社会は、この修復や回復のための文化的な装置が準備されており、こうした一例としてこの事例を理解することも可能と思われるので留意したい。

#### <ムラ神の越権行為の戒め>

ユタ 御願した方がよいでしょう。そのときの御願はだれがもち（行い）ますか？。

そのときの御願は？

依頼者（遠慮がちに）わ、わたしがやりましょうかね。

ユタ おたくはカミのチヂを受けている子か？御嶽（ウタキ）の係り？ムラのカミ（ムラガミ）？（「カミのチヂを受ける」とは、それぞれの神から役目が与えられてはじめて神役となることを意味する）

依頼者 はい。

ユタ（急に敬語にあらためて）ムラガミのなんのムラガミになられておられますか？（「ムラガミ」とは、村の政としての祭祀を司る神役）

依頼者 ウッチガミ（掟神）〇〇〇（地名）の。

ユタ 〇〇〇のウカッチュガミ（掟神）。

依頼者（うなずいて）この御願、やっていいですか？

ユタ あのねー、ムラ番の衣装（ムラの神役の着る白衣装）をかけてムラの行事に出るカミ人は、後生神（死者の世のカミ）の御願は通しきれません。（厳しい口調で）ご無礼になる。おたくのチヂ（カミ）に！おたくは、後生の七役所のカミの職務分をもっていないよ。

依頼者（弱々しく）そうですか・・・。

ユタ できません。これは根神（ニガミ）、ノロ、掟神（ウッチガミ）、手伝い役（ニブトイ）やサンナム）は七の御嶽の七の神役。ムラの有地の工事ごとの責任者であって、ホトケサマの工事ごとにたずさわる責任（帳簿に登録されている）じゃないです。おたく、失礼になるよ。自分のカミに対して。

一連のこのハンジ場面は、墓の儀礼執行について、依頼者自身がこれらの御願を執り行

いたいがいよいかと、ユタに伺いを立てる場面であった。このとき、ユタは、ムラの政の祭祀を行う掟神（ウッチガミ：ノロのお手伝いをするカミ）の役割を有する依頼者が後生の儀礼を執り行うことは、道理の通らないことであると戒めた。いわば、ムラの祭祀を執り行う神役が不浄とされる後生に関わる儀礼を行うことは許されないということである。依頼者は、ユタから「あなた（依頼者）自身のカミがこのことに怒り、やがてあなたはやられるよ」と一括される。すると、依頼者は事の重大さに慄き、強く動揺する。そして、依頼者は、これまでの自ら行った数々の後生関連の儀礼執行、すなわち「禁忌」を破ったことをどのようにして解けばよいか教えて欲しいと懇願する始末である（作業仮説(1)(2)関連）。

依頼者は、このハンジ前からムラのカミである自分が祖先事の儀礼執行に携わってよいかどうか、気にしていたふしもある。依頼者は、後生のウガンを自分がやってはいけないということを知らなかったと語る。一方、ハンジ後の面談において、「Yユタから、Cちゃん、上等、（後生のウガンを）やりなさい。あんたのウガエン通るよ」といわれていたと弁明している。気にしながらの儀礼執行であったことから、ハンジを通してユタから厳しく言われたことで、納得し、今後、絶対やらないと決めたといえる（作業仮説(3)(4)関連。また、自らの逸脱感の払拭、すなわち逸脱行為の修復・回復装置的な役割も関連）。ちなみに、上記例題について、HSユタの考え方が一般的かといえば、必ずしもそうではない。ユタをムラや親族のカミ役として容認するユタもいる。

#### 4 ハンジの機能仮説

ユタのヤーにハンジをとりにいく人びとは、ユタのハンジをどのように活用しているのか。これは、われわれが本研究に着手したりサーチクエスションである。こうした視点からこれまで記したことを振り返ると、ハンジとは、必ずしもユタが依頼者を前にして、①依頼者らの先々のことを占うことではない。②依頼者が見ることのできないことを見させてくれるものでもない。③依頼者らの未来を予知して提示してもら筋合いのものではない。一方、依頼者も、こういうことを求めてユタのヤーを訪ねているのではない。これまで例示したユタと依頼者のハンジ過程の例は、これらのことを如実に示している。

紹介した事例が示すように、ユタのヤーでは、ユタが一方的に話すのではなく、依頼者も積極的にやりとりを行っている。それどころか、依頼者がやりとりを行わないとハンジは成り立たないのである。そういう意味で、ハンジ場面とは、依頼者が自らの心配事や気がかりとなっていることについての思いや仮説をユタとのやりとりをおして吟味し、はっきりさせていく過程といえる。その前提として、依頼者は、ユタが自分のかかえている心配事や気がかりとなっていることの原因や道筋をはっきりさせて、これによって生じている気になる観念の払しょくに導いてくれる存在だと信じていると見ることができる。

以上のことから、ユタのハンジの機能的側面を理解する上で次のような仮説を立てることができる。

- (1) 依頼者は、現実生活での個人や家族・親族レベルの心配事や気がかりなことを解決できる見通しを立てるためにユタにハンジをとらせにユタのヤーを訪問する。
- (2) その際、依頼者は、自ら心配していることや気がかりとなることがどういうものか、どのような理由（因果関係）によってこれが生じているかなどについて、自分なりの仮説をもっている。
- (3) 依頼者は、自分なりの仮説について、ユタとのやりとり過程を通して、この考えを整理・強化、または改め・修正し、さらにこれらの対処策をみいだす。依頼者が得たハンジを当たっていると評価するのは、依頼者自らの仮説がそのとおりであったとして、納得し、腑に落ちたときである。

しかし、必ずしもユタの語りがすべての依頼者に役立つとは限らない。時には、依頼者は、ユタの出すハンジを無視する場合がある。また、依頼者は、訪ねたユタの出したハンジに納得できないと、自らの考えや仮説に合致するハンジを求めて、別のユタをたずねることもある。あるいは、ユタ自身が自分には依頼者の要請に応えきれないので、より霊力が高いと認めるユタを依頼者に紹介することもある。時には、ハンジ場面で訴える依頼者の家族の症状を聞いて、早く病院へ連れて行きなさいと助言することもある。このようにハンジ場面は、柔軟な対応が可能な場であるといえる。

## 5 県外出身院生を依頼者としたハンジ過程の分析

だれでもユタを活用することはできるだろうか。やはり、ユタを活用するにはそれなりの条件が必要と思われる。これまで見てきたように、ユタは一方向的に先を読む占い師ではない。ハンジを求める依頼者との語りに関連づけて、ユタは自身の考える伝統的な思考（知識・信念・規範・価値観など）を提示する。依頼者は、ハンジというユタとのやりとりをとおして、自ら考えている問題の仮説を吟味・検証する。依頼者がユタとこのようなハンジが展開できるには、もちろん心配事があって、その解決へ強く動機づけられ、また、ユタの語る伝統的な知識・信念・規範が反映された語りが理解できるという条件などが必要といえる。つまり、依頼者は、ユタの見えているもの、例えば、祖霊の事や墓地・屋敷のカミ、屋敷の状態、土地のカミの事など、超自然的存在とかかわる諸現象についての語りが理解できるから、互いにハンジを展開することが可能となる。ちなみに、ユタを活用する初心者の主婦には、だいたいユタのハンジに慣れている祖母やオバたちが同行する。ハンジ場面では、同行者が時々ハンジ内容を解説、助言を行う。大橋（1998）は、これを主婦の社会化という視点で論じている。

そこで、われわれは、生活圏や民間信仰を異にする県外出身者の大学院生にユタの依頼者になってもらうことで、前述したような仮説の検討を試みた。もちろんユタの依頼者になることが実現したのは、院生の興味・関心からである。これから検討するのは、ユタに関心があり、一度ハンジを体験してみたいと思っていた大学院生の事例である。Sユタには、依頼者が女子大学院生であること、ユタに関心をもっていること、県外出身者である

ことを伝え、快諾を得た。両者にはさらに、ハンジ場面の観察と録音と写真撮影に関する了解を得た。われわれの関心は、祖先崇拜や民間信仰などにおいて生活圏が異なる県外出身の大学院生がユタのハンジ場面でどのようなやりとりを行うか、ハンジがどのように展開するかにあった。実際のハンジ場面の展開を記録することについて本人の了解を得てハンジ場面に臨んだ。ユタは、久米島に居住する当時、65歳の女性Sである。2011年2月、久米島のユタ・S宅で午前10時から11時半までの間、ハンジをとってもらった。場所はSユタのカミが祀られている奥座敷である。

このハンジ過程を検討する前に、事例分析の仕方について述べる。まず、われわれは、ハンジ場面をユタと依頼者のやりとり過程として捉えた。両者のやりとりは、ことばによる対話である。その際の対話は、「何があったか」という「体験事象」と、依頼者のその際の「こころの状態」、そして対話の内容における「登場人物」という構成で、これに筋書きが入れられてはじめて、「語り」、または「物語」となる。つまり、自らの体験が「語られる」ということは、当事者の経験を物語の構成要素に当てはめて筋書きを入れ、ことばで語るということである。「語り」または「物語」とは、ここでは、客観的な事実であるとか、想像であるとかは問われない(J.ブルナー,1999)。ハンジ過程をこのようにユタと依頼者のやりとり過程、すなわち対話として捉え、そこでどのような「語り」や「物語」が生成されるかの分析を試みる。そこで、事例については、左側の欄に両者のやり取り過程を示し、右側の欄に依頼者の気持ちや考えの説明を対応させる形で示した。

ここで、さらに「物語」の分析視点について少し触れる。人が自らの過去や体験について語る場合、「語り」は、前記したとおり、構成要素(体験事象、心の状態、登場人物)が使われ、これに筋書きが入れられたものである。これは自分に起こった種々の現象を自分にとって意味のあるものとして作り上げていく営みとされている(岡本夏木・山上雅子,2000)。しかも、「語り」は、共有する文化を背景にした、行為を意味づける仕組みである。ハンジ場面でのユタと依頼者の「語り」や「物語」は、依頼者がユタとのやりとりをとおして自らの有する心配事に関する因果仮説を納得するためのものである。同時に、これは、自分を取り巻く人々にも納得させたいためのものでもある。「語り」が周りの人の共感を得ることとなると個人の体験がみんなでも共有され、これが個人に自信を与え、安らぎとなり、個人の存在する意味や価値もこれによって高められる。これが個人の適応に奉仕することはけだし当然である。

## 大学院生を依頼者としたユタのハンジ過程

ハンジ過程の記述と依頼者の説明 <ハンジ場面>

記述資料に基づいて、Sユタと依頼者(CI:クライアント)のハンジ場面でのやり取りについて考察する。記述資料が示すように、ハンジ場面でのやりとりは約90分という長時間にわたったものの、ほとんどの課題領域でハンジが展開しなかった。

最初に、全ハンジ過程で、どのような課題・領域がユタから出されたかを検討する。課



## 依頼者（大学院生）とユタのハンジ過程

S &amp; Cl

やりとり過程

ハンジ後の Cl の説明

## &lt;導入&gt;

S ユタ:ええと・・・住所

Cl :住所・・・住所というのは今住んでいるところですかね  
宜野湾市〇△でアパート名も言った方がいいですか

S ユタ:はい。

Cl :△〇△〇

S ユタ:(聞き取れず)

Cl :はい。△〇△〇・・・

S ユタ:英語なんだ。

Cl :はい、そうなんです。ひらがなで・・・

S ユタ:ひらがなでいい?

Cl :はい。△〇△〇の×××号室。

S ユタ:近くにM(スーパー)があるところ?

Cl :M・・・えっと、違うと思います。

S ユタ:ああ、そうか・・・宜野湾市か。で、名前の方。

Cl :KCです。

S ユタ:KC?大島の人なの?

Cl :いいえ、内地です。

S ユタ:実家の住所は?

Cl :宮崎県〇〇市△△町・・・です。

S ユタ:なんの人(干支?)。

Cl :干支?丑です。

## &lt;死霊&gt;

S ユタ:丑。・・・今、住んでいるとこ、ここ。・・・こっち側っていう  
と、丑の方角。

S ユタ:丑?こっち側?丑の方角。

Cl :丑。南西の5階

S ユタ:南西・・・

Cl :はい。

S ユタ:で、あのね、そこのところから何か・・・朝方と昼間と夕  
方と一日に3回くらい、なんか、行ったり来たりしている  
な、なんか見たことある?Cl :ん?・見たこと・は、・ん・ないと思うんですけど・・・まあ、  
ちょっと、気のせいとは思っているんですけど、よく机の  
上に置いていたものがすぐなくなったりはするんですよ最初、動物のことか、虫かなと思  
った。その後、お化けのこと  
かと思った。  
物がなくなるのは、不思議だ  
など見ていたが、特に気には  
しませんでした

## S &amp; CI

## やりとり過程

## ハンジ後のCIの説明

S ユタ:なんか、あの、飛んできたりする？ ポルターガイスト  
みたいに。

## &lt;40代男と子どもの霊&gt;

CI :・・・うん、ないんですけど、机の上に置いてたりモコン  
とかが、もう、目の前に置いていたのに、すぐもう目を離  
したらなくなるとかはあります。でも、たぶん気のせいぐら  
いに思っているんですけど。

S ユタ:男の人で、40代ぐらいの人と、あと、小さい子ども。

CI :小さい子ども・・・?

S ユタ:小さい子はなにか・・・遊ぼう、遊ぼう、みたいな感じ。遊  
びたいみたいな感じで・・・来るんだけど、寂しい、寂しい  
って言っている。寂しいよーみたいに、言っているから、  
楽しいんだったらいいけど、寂しい寂しいって言っている  
から・・・あんまり、その・・・うん。小さい子どもでも、やっぱ  
り祓ってもらったほうが・・・祓ってもらったほうがいい。

## &lt;お祓い方法&gt;

CI :ああ・・・それは、どうしたらいいですかね、それは。

S ユタ:これはね、あの、(首里の)観音堂行ってさ、丑の人だか  
ら、こっち側のこくぞう(虚空蔵)菩薩様が守り本尊だか  
ら、あの、首里観音堂にこのこくぞう(虚空蔵)菩薩があ  
がってらっしゃるから、行ってあの、住職さんがちゃんと  
お祓いしてくださるから。

CI :そのちっちゃい子って、どんな子なんですか。

S ユタ:小さい時にそこらへんに、死んだから、そう簡単に捨てら  
れたんじゃないかな。あの、男の人は、現代の人ね。

CI :現代の人?

## &lt;子どもの霊へのお供え&gt;

S ユタ:10まだ、7、80年くらいまでの人なんだけど・・・女の子・・・  
もう、ちょっとあの、えっと、いつもなにかお菓子とかさ、  
牛乳みたいのとかをお供えしてあげて、遊んではあげら  
れないけどこれお腹いっぱい食べていいよってふうにし  
てやってあげると、どっか、これあの窓辺とかにね、小さ  
い器に入れてやってあげられると、ここにいる間それやっ  
てあげられると、座敷わらじみたいなものになって・・・まっ  
たく、霊と、あの、座敷わらじとは、神様みたいな、仲いい  
ってうかね、そういう感じなんだけど。そういう感じで、

「お祓い」については、意味  
はわかっていたが、半信半  
疑でした。

「40代くらいの人と子ども」  
については、まったく見当が  
つきませんでした。興味はな  
かったのですが、「小さい  
子」が何か気になりました。  
小さい子どもの霊でも、お祓  
いが必要かなと思いました。  
ちょっと、不安や心配があり  
ました。

「おなかをすかしている」とい  
うので、「餓死した子」かな、  
と思いました。ずっとお腹が  
すいているから来たのかなと  
思いました。

「屋敷わらじ」は、知っていま  
した。

## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後のClの説明

なんかあの、それに近いような状態で、いいあれを、あの、もたらしてくれる。

Cl : それ、方角は(男の人と子どもが行き来している)？

S ユタ: 大体同じような。

Cl : あ、同じような。

**<墓・墓の移動との関連>**

S ユタ: そこらへんになんかあるんじゃないかな。外のほうに。

Cl : 外のほう？

S ユタ: うん。ムンチュー墓みたいなのとかさ。

Cl : ん？

S ユタ: ムンチュー墓みたいなのとかがあつてからさ。お墓・・・

Cl : ムンチュー墓ってなんですか？

S ユタ: 沖縄のムンチュー墓って、お寺みたいな。その一族だけが入るといふ・・・

Cl : ああ。

S ユタ: そういうのとかさ。そういうの、あの、工事のために、お家たくさんつくって、あの、近代的なビルとか工事をするために、それをあの整地して、お墓とかを全部掃って、その上に建てたつていう、こういうふう。それ、すごい霊視は強くこの・・・

Cl : へえ・・・

**<霊への対応とお祓い方法>**

S ユタ: (首里)観音堂行って、住職にお話したら、5000円くらいでやってくれると思う。

Cl : 住職さんに、お願いしに・・・

S ユタ: だからあの、それ、このままほつとくと、あとは居ついたりとかされるもんでさ。だあ、あの、彼氏できたりして、お家にあの、彼氏が遊びに来たりとか、すると悪いことする、たぶん。

Cl : はい……。悪いこと……。

S ユタ: うん。また、あのやきもち妬いたり、とかね、霊なんだけど。それとつても、強くあのやきもち妬くもんで、危ない。あの、学校の機械とかもさ、ちょっと気をつけないといけないことになるから。ちゃんとお祓いして、きれいにしたほうがいいと思う。

Cl : はい。今のところは、これ、ずっといるわけではないんですか。

「ムンチュー墓」については、全然、なんのことかわかりませんでした。

この段階で、お墓見たいなものを想像していました。

「5000円」、そこまでしないといけないのかと思いましたが、たぶんやらないだろうと思っていました。気になりましたが・・・

「学校の機械」と言われ、パソコンのことを想像しました。当時、私のPCは、調子が悪く、夜中にスイッチがついたりして意味がわからなかったの、気を付けようと思いました。お祓いしないと危険かなともふと思いました。

## S &amp; CI

## やりとり過程

## ハンジ後のCIの説明

S ユタ: ずっとはいない。朝と昼と晩と・・・なんか、食事に来てい  
るのかな。なにか、食事にどっかに行くのかなにか、そこ  
を通っていくのね。

CI : へえー。

S ユタ: 考えてみたら、朝昼晩と食事なんだよな。

CI : たまたま通るんですかね。私のところを。

S ユタ: うん。普通のね、あの、霊だったらさ、夕方から来るって  
いうのが多い。朝からもっていうのは、まあ、本当に・・・あ  
の、朝、太陽が上がる時っていうのは、霊は、なに、来  
ない。

CI : うん。

S ユタ: 交通事故じゃない・・・交通事故で亡くなった人じゃな  
い・・・なんか、ちよつと、あのいいとこの・・・ちよつと贅沢に  
しているような感じ。なんか、あのいいとこの・・・おじさん  
みたいな。

CI : その・・・来る人？

S ユタ: 来る人。・・・この人のね、好みなんだって。ぼちゃつとし  
てるの(笑い)。

KC さん、この人の好みなんだって。ぼちゃつしててる感  
じの人。

CI : それは、困りますね。

## &lt; 霊の素性 &gt;

S ユタ: なんかさ、あの軍用地とか・・・軍用地とかいっぱい持って  
て、なんか、ちよつと・・・成金ぽいような感じの人で・・・お  
家は、結構いい暮らしをしている家なんだけど、親から・・・  
お父さんお母さんか、おじさんおばさんか、兄弟とかが  
そういうのを全く知らない？ その、あの、亡くなった現場  
から、お墓に魂を、魂招き(たましいまねき)をしてなくつ  
て、ずっとそこを行ったり来たりしている。現場と。

CI : へえ・・・事故現場とその、行くところ・・・

## &lt; 霊の感知について &gt;

S ユタ: あのさ、たまに・・・耳のそばからさ、ふうーて、ふうーて、  
生暖かい風・・・なんか、人が息をかけた、ふうーて吹き  
かけるような感じ。ふあっていかない？

CI : わからないですね。普段は結構、髪の毛たらしていたり  
するんですよ。

S ユタ: 髪の毛たらしている人は、すごく強く感じるよ。風とかも

食事は部屋でとらない方だ  
ったので、どうしてかと思い、  
質問しました

(供養という観念はない)

「交通事故死」について、周  
囲にそういう人がいなかった  
ので思い浮かばなかった。

霊に好みがあると聞いて、  
思わず笑ってしまいました。  
困ったという気持ちでした。

この霊は、だれも世話してく  
れなかったんだろうか、と思  
いました。

どのようなことか、あまり想  
像・理解ができなかった。

どういうことか理解できなかつ  
た。

## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後の Cl の説明

なにもないんだけど、家閉めてあるんだけど、風がきたみたい  
いに、髪がふわってするって。

Cl :ふーん。・・・あんまり、感じたことはないですね。

S ユタ:これを・・・一度、祓って、あの、なんかお札(おふだ)もら  
ってきてから、玄関とかに貼ったり。

Cl :うん、玄関・・・わかりました。

S ユタ:私はいつも、あの、——ビンの紐で、三つ編をやってか  
ら、沖繩でサンって行って、おまじないの、このあれがあ  
るわけ。あれをこうやって結んであげたりとか。あと、車。  
しょっちゅう事故起こす車とか、下げて持たしたり。まあ、お守  
り(なの)。とっても強いからって、それよくやるんだけど、靈  
商のあれは商売していて。もう、変なお客さんが来るとかつ  
ていうふうに・・・。(サン＝魔除け用)

Cl :ふーん。まあ、そういう時とかに、お守りとして・・・ああー。  
なるほど。

S ユタ:沖繩・・・(には)ずっとは、いないね。

Cl :そうですね。

S ユタ:なんか・・・家でなにかやらせよう、やらせようって。あなたに  
やって、もらおうって。

Cl :誰がですか？

S ユタ:家族が。

Cl :ああー。そうですね、帰って来っていうのはあります。・・・う  
ん・・・その、口では、多分言わないと思うんですけど。

S ユタ:でも、あなたさ、一応、M(県、郷里)に帰ったらさ、あの・・・  
行くところたくさんある？お参りするところ。

Cl :私が？お参りするところ？

S ユタ:うん。お参りするところがいっぱいある？自分が、この、あ  
の・・・ここで(郷里で)生まれたでしょ？

Cl :はい。ああ、そうです、そうです。多分そこです。

S ユタ:ここで生まれて、この、あの、このいい人と一緒になるまで、  
年頃になるまで、——あの、届かしてください

Cl :ああ。・・・うん。

## &lt;守護霊について&gt;

S ユタ:あのね・・・守護霊ではなくてね、守護人でもなくて、守護神  
あの、神様が、守護として、付いている神様がいらして。  
で、あの、変な霊とかが出入りしているのも、ちょっと、普通

「お札」は知っていた。  
危ない時には持ってい  
た方がよいという感じで  
考えていた。

あまり、意味がわからな  
かったが、相手に合わ  
せるようにしてしまし  
た。

実家のことは考えてい  
なかった。親は、たとえ  
思っけていても口には出  
さないだろうと思ってい  
ました。

このところは、もう、た  
だ、相手に合わせてい  
た。

## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後の Cl の説明

は、もう、うつになつたりとかさ。ケガしたりとかなんか、こんなとかあるんだけど、それがないのは、あの、この神様が守護しているのかがすごく強いもので。神様は、出てこないかなあ。

Cl : どこに・・・?

S ヌタ: 頭の中に。

Cl : 神様・・・

**<高千穂神社への参拝>**

S ヌタ: あかね、あっち行った方がいいと思う・・・高千穂(神社)とかさ。

CL : ああ、よく行きます。

S ヌタ: お参り行ったほうがいい。ご恩あげて行ってからさ、お賽銭のなかに、なにか、あの、おまんじゅう・・・

Cl : おまんじゅう?

S ヌタ: うん。持って行って。ありがたい印なんです、おまんじゅうつて。

Cl : ふーん。・・・そうですね、確かに、ちょっと健康で・・・

S ヌタ: 帰ったときは、あの、結婚も、いい人とめぐりあわせてくださつて。

Cl : 帰ったときですか?

S ヌタ: うん。自分が、あの、勉強してること、研究してることも、ちゃんと、順調に実になってくださいって。

Cl : はあ。ありがたいですね。うん。こういうのはお礼として、帰ったら、どんなとこに、行ったらいいんですか。

S ヌタ: はい。高千穂のそこ、あの高千穂神社あるでしょう。ずーつと、その山行ったあたりが拝所なんですよ。あっち行って、こっち行ってっていうふう。

Cl : 私、そうですね。沖縄から帰ってきて、疲れたら、実家帰ったときに高千穂に行くんですよ。だから、また行ってみます。

S ヌタ: 私はさ、あの、高千穂の、あっちの峰のところに・・・お家に行って、体だけで行くの。あれさせられたことあるんだけど、ロッククライミングみたいな。

Cl : へえー。

S ヌタ: こんな岩場で、こんな。上は平ただけで、こんなになっていて、で、こっち手かけているんだけど、もう登れないってい

宮崎のカミサマが守っているとりたいのでしょうと思いましたが、それでもけがするけどなとも思いました。

ピンと来た。(高千穂は)すごく好きでした。よし行こうと思った。実際、高千穂溪谷へよく行った。「御恩あげて」と言われ、何のためかはしらず、守ってくれているカミサマの所へはお参りに行った方がよいとは思っていました。

ここは、単に聞き流していました。

## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後の Cl の説明

うところまで来て。でも上になにがあるかは、ちゃんとみえるわけ。で、神様が、もういいよっておっしゃって。ここまで登った人はいないから、褒美あげるっていつてから。こんな大きな、こう、手袋。こう、手袋よ。この手袋って、先祖おとしていいよって。あの・・・許可証みたいなの。

Cl :へえー。

S ユタ:そういうことあるけど、一応・・・高千穂の神様は、いっぱい・・・あの、新暦の2月いっぱいまでにとか、あとその年の12月にありがとうございました、今年も一年ありがとうございました、と言って。

Cl :でも・・・うん、行ったほうが・・・

S ユタ:だからあの、15日から、とても、どんどんどんどん強くなっていつている。で、いろいろとあの、プラスの方に行っているから。あれもこれもって、いろいろこう手出さないようにして、自分の身近にいる神様・・・。

Cl :自分の身近にいる神様？

S ユタ:うん、高千穂の神様を・・・

Cl :うん。ああ。

S ユタ:あれ、一番上は、あの、人が入ってはいけないでしょ。なんか、壊れてるとこあるでしょ。

Cl :一番上？どこですか？

S ユタ:高千穂の一番・・・神様があの、——入れないでしょ？

Cl :私、わからないです。そこまでは、行かない・・・。

S ユタ:あっち、多分入れないと思う。

Cl :へえー。そこまでは、行ったことないですね。そうなんですね。

S ユタ:それは、あの、できたら。できないときは、どこか、あの、遠いところに行くときは、その辺のあの神社とか行って、お通し(ウトウシ:遙拝)してもらって・・・。

Cl :お通し？

S ユタ:うん。お通しっていうのは・・・高千穂の神様に、ここからつないてくださって、自分の、あの、自分は今どこに来ていて、(今は)行けませんので、どうか、ここから、あの、お願いすることは、どんなに離れてましても、受け取ってくださいって、いうふうにして、あげていた方が、いろいろと順調に行く。

「高千穂の神様」には、ピンと来ませんでした。宮崎のさっきの話を続きかな、宮崎の守ってくれているカミサマの話かなと、思いました。想像をめぐらせましたが、よくわかりませんでした。

「お通し」の意味もよくわかりませんでした。

## S &amp; CI

## やりとり過程

## ハンジ後のCIの説明

CI :はい。うーん。

<結婚のこと>

S ユタ:でも、ちょっと、結婚遅れるかな。

CI :(笑い)遅れるんですか。

S ユタ:ちょっと、..遅れそう...

CI :どれくらいですか？

<子どものこと>

S ユタ:でも、大丈夫よ。子どもは二人生まれる。

CI :二人...これって、どんな人ととかってわかるんですか。

S ユタ:...同年代くらいかな。

CI :ふーん。

<家族の健康>

S ユタ:...家族の中に...なんかさ、胃潰瘍みたいな感じの、胃が痛いって言ってる人いる？

CI :家族ですか？え。今、今ですか？

S ユタ:今。

CI :ああ...誰だろう。

S ユタ:チクチクしてるみたいな、痛みのある人は、すぐ病院行った方がいい。

CI :はい。家族...うん。誰だろう。

S ユタ:明日行こうとかさ、来月行こうとか言って、言わないほうがいいよ。すぐ行った方がいい。胃がちょっとおかしいっていう人...

CI :胃がちょっとおかしいっていう人...誰だろう。

S ユタ:食欲にちょっとムラがある人。

CI :うん...

S ユタ:...お兄さん...

CI :ん？

S ユタ:お兄さん。

CI :私、長女なんですよ。

S ユタ:弟...？

CI :ああ、弟なんですかね...

S ユタ:...なんかさ、ちょっと、ストレス...

CI :うーん。

S ユタ:でもあれね。あの、沖縄と違って、女の子でも落ち着けるところだから。

突然、結婚が遅れるって  
どうということ、いきなりどう  
ということという思いでし  
た。

子どもが二人といわれ、  
これは気になってたずね  
ました。  
よくわからないので聞き  
流しました。

兄はいないので、事実で  
ないことは受け入れたく  
ないと思い、相手に合わ  
せようか、訂正してもら  
うか迷った。相手があて  
ずっぽうか、どこまで「見  
れるのか」知りたくてあ  
えて言わずに相手に合わ  
せていた。でも、聞き流  
すと失礼かと思ったの  
で、長女と言いました。  
相手は、勘で言っている  
ような気がしました。  
もしかしたら、家族にス  
トレスを感じている人が  
いるのかと気になりました。  
お父さんか、弟かと思  
いました。



## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後のClの説明

Cl :どこ、ですか？

S ユタ:あの、M(県)とかさ。沖縄と違うから。

Cl :(笑い)

**<交際相手のこと><家の飾り物>**

S ユタ:ね。そういうことになるかもしれない。考えていた方がいいかも。あの、ちゃんと、こっちにさ、入って、一緒に暮らしてもいいよっていう人がいたら、いいんじゃないかなと思う。弟じゃなくてね。継ぐ人がいてくれるんだったら、マスオさんしてくる人があるんだたらいいんじゃないかと思う。・・・あと、お家にさ。お家に、なんか、あの・・・水晶なのか。こんな、あの、宝石類の石なのか・・・これくらいの大きさが・・・

Cl :ああ・・・これ、どっちにですか。たぶん、宮崎の方の家にあるかどうかはわからないですけど、沖縄にはたぶんないと・・・

S ユタ:玄関のあの辺とかに、トイレのあの辺に置いてあるもの・・・

Cl :ああ。実家にあるかな。実家にあるかもしれないです。

S ユタ:これ、ちょっとね、あの、大事にしていた方がいい。

Cl :はい。

S ユタ:おばあちゃんの時代に、どっかの神社さんから魔よけとして、頂いてきてある石なんだけど。ちゃんと入魂されていて、低いーだから、それを、ちょっとそれを大事にしていって・・・

Cl :はい、わかりました。

S ユタ:・・・実家のさ。

Cl :はい。

**<屋敷のカミサマ>**

S ユタ:門から入って左側に、塀よりちょっと、高い・・・何の木かな。楠の木かな。あの、三本くらいこんな(ふうに)して生えてるんだけど。

Cl :はいはい、何の木だろ？

S ユタ:それさ、あんまし高く生やさないほうがいい。

Cl :ああ。低い方がいいってことですか？

S ユタ:塀よりちょっと、ちょっと低いくらい。あんまり出ないほうがいいって。屋敷の、なんか・・・屋敷との荒れが悪いって。あんまり高くなると。風水的に。

S ユタ:はい。・・・ああ。

あの人のことを言っているのかな。一応、想像する人はいました。でも「沖縄にたぶんいないでしょう」と否定しました。さっきは、否定しましたので、今回、(宝石類の件を)否定できず、聞いておこうと思いました。

ピンときませんでした。

土地のカミサマという観念はありませんでした。

## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後の Cl の説明

S ユタ:自分たちで切りはしての?

Cl :はい、自分たちでも切っちゃっていいんですけど。

S ユタ:あんまりこれが高くなりすぎると、福がやって来ない。

Cl :ええー。…そっか。3本くらい、この…

S ユタ:陽をあてるように。屋敷のど真ん中に、陽が当たるようにすると。あの、なかなか屋敷。土地の神様たちには、いいところ。

Cl :はい。うーん。

S ユタ:そうやって屋敷に陽を当てるようになると、衣食住恵まれる。

Cl :うーん、はい。

S ユタ:この木が伸び出してきてから、あんまし、ちょっといいことないかな。

Cl :へえー。

S ユタ:なんか、体の。家族のなんか中で、ちょっと体の具合が悪くなったとか…前のこう、和気あいあいとしていたのが、なんか、こう、家族の中で、ご飯を同じ時間に食べなかったりとか。ちょっと…特に男の人がね、そういうところある…で、この、あの…学校から遅く帰るときとかはさ…

Cl :はい…沖縄の家、ですよ?

S ユタ:うん、遅く帰るときは、何か光り物。

Cl :光り物?

S ユタ:光り物。こんな…こんな光り物をいつも身につけるとか、手に持つとか…

Cl :うーん。光り物。

### <居住地付近の浮遊霊>

S ユタ:後でつくってあげようかな。それを持って、学校行き帰りしたほうがいいね。なにかさ…あんまり、あの、この辺、いろんなことで亡くなる人が多くて、だからすごくあの…土地自体はすごい神様がたくさんいらっしゃる場所なんだけど、人間があつた亡くなったりとかして、いろいろ汚してしまって、それをあの、また、ちゃんと、あの魂招き(たましいまねき)をしてないから、そこら辺をずーっと浮遊して、自縛霊になっているもので…ちょっと、これをきれいにしない間は、まあ、ついてきたりするから。あとでつくってあげる。

Cl :はい、ありがとうございます。

日光に当たれば植物が元気になるといふことかと思いました。

(この脈絡は) どういうこと、どういう意味で考えてよいのかわかりませんでした。

(この脈絡は) 話を聞いているもののほとんど頭に入ってきませんでした。単に聞き流していただけです。

## S &amp; CI

## やりとり過程

## ハンジ後の CI の説明

## &lt; 拝みの必要性 &gt;

S ユタ:・・・こっちにいてさ、あっちこっちの神様が、こっちにお参りにおいでってとかいって、そうやって夢の中とかにでてきたりしたら、自分は、あの・・・高千穂のあるあそこの、M(県)の生まれですから、高千穂はずっと行ってますけど、沖縄のあの、ウガンジュ(拝所)とかカミサマは、よくわからないもので、ヤマトンチュですから、別に重んじないわけじゃなくて、とても、あの、重んじてはいますけど、あの・・・行くっていうこと、できますって。

CI : どういう風に、お伝えしたほうがいいんですか。

S ユタ:うん。したら、ここ行くと、次こっち、こっちって、もうずーっと行かされる。最初で、高千穂、足繁く通ってます、っていうことを言って・・・おかないと、ずーっと沖縄中まわらんといけなくなる。

CI : ああ・・・わかりました。

S ユタ:だけどもね、あの・・・霊症に対して、強い？

CI : 強い・・・

S ユタ:うん。一応、強い。自分で感じて、あつ、なにかおかしい、おかしいって感じるんだけど、あの・・・体の中になにかこう・・・自然に祓われていって・・・

CI : 自然に祓われていく？

S ユタ:うん。その、なにか持つてるなにかが、こうやって・・・例えば、ほら、ずーっとお経読んでいる人とかいるさ。したら、そういう人は・・・墓場行こうが、どこ行こうが、体の中からこうやって、じわーって、この般若心経がずーっと出てくるもので。向こう・・・そういうふうな感じで、よける力が強いから。だから、あの・・・その強いのを、頂いてる神様にお礼言っていないと、それが薄れてきたら、困るよーって。

CI : うちの、えーっと、母方のばあちゃんが、毎日、なんて言うんですかね。お祈りみたいなのをしてるんですよ。・・・ずーっとお経読んでるっていうか。それなんですけど・・・

## &lt; ひったくり被害について &gt;

S ユタ:・・・ひったくりみたいなのにごをつけてください。

CI : ひったくり・・・

S ユタ:ひったくりみたいなのあった？

CI : ありました。

「ウガンジュ」とか、カミサマは、意味がわかりませんでした。

ほとんど意味がわからずに単に合わせているだけでした。

ほとんど意味がわかりませんでした。

想像したら、母方祖母のことが浮かんできた。

突然、ひったくりなどと、言われて、戸惑いました。それでも、一応、合わせました。

## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後の Cl の説明

S ユタ:あった?

Cl :ひったくり・・・ない・・・うん。・・・これは沖縄で、ですかね。

S ユタ:沖縄で。

Cl :うーん。ない・・・うん。・・・気をつけておきます。

S ユタ:なんか、オートバイ乗って。

Cl :うん。

S ユタ:・・・高千穂の生まれとしても、磨きいちおうかけなさいと。

Cl :うん。

S ユタ:高千穂で生まれてさ、沖縄に来るっていう人は、あれがとても高いから。来させられるっていうのはある。だから、それを・・・どうしてだろうっていうような・・・磨きをかける。

Cl :磨きをかける・・・それは、どうしたらいいんですかね。

S ユタ:・・・お経とか祝詞(のりと)とか、そういうのとかも、いつも演じて。そういうのを身につけていくとか。

Cl :ああー。

## &lt;悪霊への対処策&gt;

S ユタ:あの、うん。悪霊とか。悪霊とかを、諭す言葉とか。また、あの、いい霊を褒める・・・とかっていう、そういうのを、あの、見極めて。これ、じゃないさ、これはいい霊さっていうのを・・・

Cl :そういうのを、自分でできるようにって、いうことですか。

S ユタ:うん。

Cl :ああ・・・はい。

## &lt;高千穂と宜野湾のカミとのつながり&gt;

S ユタ:・・・うん?・・・高千穂の神様は、昔・・・宜野湾の海に、こうやって、あの、船に乗って、手で漕いで、こうやって・・・来られた。

Cl :そうなんですか?へえー。

S ユタ:見立てた・・・どこだろう。ほら穴のあるところに・・・なにかの近く・・・どこだろうね。

Cl :うん。

S ユタ:あそこら辺かな・・・えっと・・・宇地泊(うちどまり)。

Cl :宇地泊(うちどまり)?

S ユタ:宇地泊。宇地泊(うちどまり)だけだよ。

Cl :宇地泊(うちどまり)って、どこですかね?

S ユタ:あの、海のあるところ。

Cl :はいはい、海の近く。はい。

人としての磨き、規則正しい生活、人間らしい生活について考えました。

お経や、祝詞のことが出てまたかと、少しがっかりしました。

単に相手に合わせていききました。

高千穂のカミサマが宜野湾市宇地泊に来たという話の意味がわかりませんでした。想像を巡らせましたが、相手の話に追いついていけません。単に聞くだけでした。

## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後の Cl の説明

S ユタ:エンダー(A&W ファーストフードレストラン)があつて。遊具のいっぱいあるエンダー(A&W)があつて・・・立体交差、立体交差になって、コンベンション行く道と・・・

Cl :はいはい。うん。

S ユタ:下の方に、こう、山が削られたようなところがあるでしょ。

Cl :うん。・・・宇地泊(うちどまり)・・・ちょっと、探してみます。宇地泊。

S ユタ:すぐわかる。海沿いのところにある。

Cl :そこの・・・うん。

S ユタ:関連が・・・

Cl :へえー。

S ユタ:そこへ、なんかあの、宮崎の人が、沖縄に来た人いっぱいいるんだけど、そこを、あの、お参りした人がいない。

Cl :いない?・・・じゃ、行った方がいい?

### <拝所へのオガミ>

S ユタ:ここは。(源)為朝伝説があるのね。まちなど、って名前がついた由来の。あそことは、また違うからね。あつちもほら穴になっているけども、それはすぐ海のそば。そばで、こうやって自然にできたほら穴みたいになっていて、この人が入ってきてしばらくそこで生活してて、ここに神様をあげたのね。・・・時々、拝んでる・・・拝まれてるような、あれもあるんだけど・・・あんまし、人がそうわからないんじゃないかな。行ってみたら、お香炉とかあるから、わかると思う。

Cl :はい、わかりました。宇地泊(うちどまり)っていうとこ。

S ユタ:なんかね、あの、普通のこんなお香炉じゃなくて、石の。

Cl :石?

S ユタ:古い時代のもんだから、石のお香炉だと思ふ。

Cl :・・・ちょっと探して、行ってみます。

S ユタ:それを、多分・・・繫いで欲しいか、ここに渡ってきた神様が、あの、高千穂に戻られてから、そこに神様を起こしたまま、それを、あの、この人が起こしたときのそれを、あの、下げてあげないと、ずーっと、ここと高千穂と行ったり来たり、行ったり来たり。もう、雨風でも荒れはしないで、ずっと行ったり来たり。これをそこから降ろしてあげるか、その人の分は、その人がしていた時の分は降ろす。降ろしても、また、あの、沖縄の人に大事に拝まれてください、って言ったら、そこ

話を合わせているだけでした。

実際は、行きませんでした。意味がわかりませんでした。

## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後の Cl の説明

に神様はずっと、あの、いることはできるんだけど。全て降ろしてしまおうと、まあ、いない。あんまり人が大事にしてないかどうかわからんけど、拝まれてないから降ろしたいのか、自分がここに、あの、—— したから—— その土地に、この、あの、おこしたときの、一切、あ、念ていうか、力とかが、括られてるっていうかね。土地の神様に括られていて、それをほどういてあげると、あの、きれいに帰る。そんな難しいことではないと思うけど。そしたらさ・・・体が軽くなる。なんか、体が重たいでしょ。

Cl : 重たい・・・なんですかね、重たいんですかね。意識としてはわからないんですけど。

S ユタ: そうやって、ずっと、あの、毎日毎日、こうやって霊が通ったりとか、一緒だったりすると、いつぺんにドバツてくる人もいるし、徐々に。徐々に徐々に、こうやって重くなっていく人もいるけど、わからないっていう人も、かなり。

Cl : わからない・・・

## &lt;家族の運勢&gt;

S ユタ: ...あと、お家の人は、この、ちょっと胃が悪そうなのを除いては、今年は、そう、あの、体悪いとかっていうのはね・・・で、お祓いしてもらってください。

Cl : はい。これって例えば、宮崎に帰る・・・でも・・・なんて言うんだろ・・・帰る前とかの方がいいってことですかね。帰る前・・・

S ユタ: あ、お祓いするのは？

Cl : うん。

S ユタ: 大安の日。いつでも。(首里) 観音堂行って、空いていたら時間の予約して、行ったらいいです。

Cl : はい。

S ユタ: やってみると、やってもらってみたらわかるよ。

Cl : うん。

S ユタ: ...このほら穴の中から、水の湧くところがあるのかな？ この、宜野湾のところ？

Cl : はい。

## &lt;悪い霊を除ける方法&gt;

S ユタ: ちょっと水が出てて・・・水・・・少し水が・・・湧くのかな。それとも、こう、石から、こうやって、下から水が、あの、中に溜まるようにできてるのか、なにか・・・その水をさ、こうやって、自分

実際、やりませんでした。だからといって、気にもなっていない。相手の話についていけませんでしたので、単に話を合わせるだけでした。

あまり、気に留めませんでした。

実際、やりませんでした。だからといって、気にもなりません。

相手の話についていけませんでしたので、単に話しを合わせるだけでした。

実際、やりませんでした。

## S &amp; CI

## やりとり過程

## ハンジ後の CI の説明

も宮崎から来てますって。この、あの、お水の力で・・頭撫で  
さして下さって、もうーどんな、——も、どんな悪い霊も、  
自分にはつかないようにさして下さって。この水で髪をこ  
うやって・・・

CI :うん。

**<子どもの霊除けについて>**

S ユタ:あんまし悪いのね？

CI :体調とかですか？いや、ないですね。

S ユタ:いえ、あんまし悪いのない。

CI :あ、悪いの？

S ユタ:悪いのがない。悪いのが出てこない。・・ただ、この、ものがな  
くなったりとかなんとかって言うのを、それをなんでだろうと・・  
もつとやってると思うんだけどさ。あの一、たまに日曜日と  
か、なんかお菓子とかコーヒー飲んだり、なんか食べてると  
きに、ポツて手入れてる。

CI :へえー。

S ユタ:つて、とつたりとか。

CI :へえー。

S ユタ:で、こんな霊さ、あとは、あの、居ついたりしたら。自分の、あ  
の、奥さんみたいな感覚で・・居ついてしまったら厄介だから  
さ。

CI :うーん。それは嫌ですね。

S ユタ:はい。やってください。で、小さい子どもには、あの、このくろろ  
ーに向かって、あの、来ても、ねえねえだし、小さい子と遊  
んであげられないし。

CI :うーん。

S ユタ:一回だけでいいから、お菓子と、あの、・・・牛乳みたい。これ  
あげるからね、持ってってねって。

CI :わかりました。

S ユタ:一回、一回だけそうやって、この一方角にお供えて。

CI :・・・はい。

S ユタ:ん、だからもう、ネエネエのところに来たらダメよっていう。

CI :うーん。

S ユタ:小さい子どもって、あの、力も強いけどさ、やっぱし言うことも  
聞くからね。

CI :うーん。

相手に話を合わせるだ  
けでした。

助言されたことは実際  
にやっていません。ま  
た、だからといって気に  
もなっていないです。

## S &amp; CI

## やりとり過程

## ハンジ後のCIの説明

S ユタ:・・・そうやって・・・ここに進んでください。

CI :はい、わかりました。

<居住地付近の霊とお祓いについて>

S ユタ:あの・・・埋もれてるものがたくさんあって、このアパート自体よりも、この周りに多いね。

CI :周り。

S ユタ:周りの土地に埋もれてるのがいっぱいありすぎて・・・戦争の時、たくさん死んだんじゃないかね。

CI :この周りがですか？この家の周り。

S ユタ:うん、周り。

CI :へえー。

S ユタ:・・・お祓いしたことあったら、大丈夫。

CI :はい。うん。・・・でも、ずっと居るんですか？その、私が来たときからというか・・・

S ユタ:でも、祓うと来なくなるからね。

CI :うーん。

S ユタ:で、そういう、なんていうのかな。来るんだけど、この、なにかいたずらしたりとかっていう、それは、あの、しない。できない。

CI :うーん。

<強い守護霊>

S ユタ:なんか、あの、守ってる神様強いからさ。なんか、そういうのをはじくのは強いんだけど、そういうあの、あれって風とかに乗ってくるでしょ。風とか空気に混じって来るもんでさ。あの、通りはするんだけど、そうやってあの、自分のあれが強いから、そう、触りはしないわけ。

CI :ああー。

S ユタ:だから、通りもしないように、今度は、そこから出入りもできないように、ちゃんと祓ってもらえばいい。

CI :わかりました。

S ユタ:ずっと通ってるうちに、だんだん重たくなって来るからさ。

CI :うーん。

S ユタ:で、あとありますか？

CI :そうですね。うーん。まあ、これから仕事も大丈夫なのか。

S ユタ:仕事大丈夫って思う。

CI :大丈夫ですかね。

S ユタ:はい。

理解できなかったので  
聞くだけであった



## S &amp; Cl

## やりとり過程

## ハンジ後の Cl の説明

Cl : ……仕事の心配はしないと思う。<Clの人物評価>

S ユタ: うん。ね。しないと思う。…——あつて。それから、なんか、あの、雰囲気なのかなんなのか、そう、(力をも)もってるみたい。……品位があつて、仕事は結構…

Cl : へえー。……ありがたいですね。

S ユタ: ……頑張ってください。

Cl : はい。頑張ります。

<結婚への注意>

S ユタ: ……トラウマならないでね。あの、結婚とか、恋愛とかに対して。

Cl : トラウマ?

S ユタ: うん。

Cl : どういうことですか。

S ユタ: なにかあの、一人の人を長いことを引き続いて、——って  
いうものがあつて、この人が、他に行ってしまったとか、他の  
人と結婚したとか、こんなのがちょっと……ちょっと臆病になつ  
てるっていうか。

Cl : うん。そうですね。

<沖縄での結婚をすすめる>

S ユタ: ……内地で結婚するよりもさ、本当は沖縄で結婚した方がい  
いかもしれない。

Cl : 本当ですか。

S ユタ: 沖縄の人、あなたみたいな人好きだからさ。でも、帰る、行っ  
ちゃうんだ。

Cl : うん。はい。

S ユタ: ……高千穂ずーと行ってたら、間違いないから。

Cl : うん。

S ユタ: ……聞きたいことなかったら、これで。

Cl : はい、ありがとうございます。

Cl : ……なんか、でも、仕事が安全なら安心です。

S ユタ: 大丈夫です。

(ハンジ終了)

根拠はないですが、な  
んかしら安心感がありま  
した。

これは、自分の「売り」  
だと思いました。いい気  
分でした。

題領域は、ハンジ過程の記述資料においてく>付きの小見出しで示されたものである。小見出しをハンジ課題順に示すと、次のとおりである。

導入、死霊、お祓い方法（抜霊）、墓・墓地の移動、霊の素性、霊の認知（感知）、守護霊、高千穂神社の参拝、結婚、家族の健康、交際相手、家の飾り物、屋敷のカミ、居住地付近の浮遊霊、拝みの必要性、ひったくり被害について、悪霊への対処策、高千穂のカミ、宜野湾宇地泊のカミ、高千穂と宜野湾の繋がり、拝所へのオガミ、家族の運勢、悪霊除けの方法、強い守護霊、依頼者の人物評価、結婚への注意、沖縄での結婚のすすめ。

以上27課題である。これから導入を除いた課題を前記した9分類メニューに沿って分類すると、「①死霊と対処法」、「②守護霊と本人評価」、「③拝所への拝み」、「④運勢（健康、結婚、仕事）」、「⑤屋敷カミ」の5カテゴリーとなった。1事例であるので一般化として積極的には言及できないが、課題・領域でみると、「法事や位牌関係など」の祖先事に関連した課題がほとんどなかった。目立ったハンジ課題は、「死霊」に関連したことや「拝所（高千穂と宜野湾市宇地泊のカミ）への拝み」に関するやりとりが多いように思われた。前者については、Sユタから振られた課題がほとんどである。この点は、死者の霊に関する課題を一つの専門とするSユタのハンジの特徴を示唆している。後者については、依頼者の地元にある神社で、日常よく通っている場所に振られたことで、めずらしく、依頼者が「ピンときた」などと事後の面談で語っていた。依頼者が宮崎出身で、高千穂のカミについて反応したことが影響している。やはり、ハンジ課題・領域が先述した一般的なハンジ過程と比べて狭い感じがするのは、依頼者が「県外の人」で、かつ「大学院生」という社会的立場が影響しているためだろうか。いわゆる沖縄で家族をもつ生活者という立場であったら、ハンジの課題・領域がもっと展開したのではないかと推察できる。

ところで、ハンジ過程の主要な分析対象である依頼者の「語り」や「物語」については、ほとんど語られることはなかった。実は、ハンジがこのように展開しなかったのは、いくつか理由が考えられる。まず、Sユタと依頼者の生活世界に関する知識や思いが異なることが背景にあったと思われる。それは、Sユタが振った課題について、依頼者は、ほとんど理解できなかったからである。これは、資料の「ハンジ後のCIの説明」欄に記載されているようにほとんどのユタの振り課題について意味がわからなかった述べていて、依頼者自身がこれを認めていた。

例えば、ハンジのやり取りが始まった最初の段階で、「なにかが、三回くらい行ったり来たり・・・」「男の人・・・小さい子・・・」というSユタが振ったことばがあった。このハンジ場面の参与観察を行なっている筆者は、ユタの振りに、直感的に「大人と子どもの死者の霊」を連想した。そして、「ユタは、供養されていない死者の霊から取り上げてきたな」「依頼者の居住する地域が元々墓地地域で、住居・施設の拡大による建築工事で大規模な墓の移設があったところだ」とか、「激戦地で供養されていない死者の霊が多いとみているのか」などと、筆者は、想像をさらに膨らませた。これは、筆者が調査でユタのハンジ場面を多く観察していることに加え、沖縄の祖先崇拝が重視されている生活様

式の中で育ったためでもある。

ところが依頼者は、ほとんどこれを連想しなかったようである。とはいえ、依頼者は、ユタの霊なるものに関連したさらなる振り課題に、これが超自然的現象のことと理解しようとしていて、居室での不思議な体験を「気のせい」といいながら、ユタの語りに沿うようなやり取りをしようとしてはいた。けっきょく、ハンジは展開できなかつた。依頼者は、多くのやりとり場面で、Sユタによって語られたことばの意味がよく理解できなかつたと語っていた。つまりユタという民間信仰の職能者に興味や関心があっても、共有する伝統的な知識がなく、かつユタのハンジを手がかりに問題解決を図ろうとする構えや態度がなければ、双方がやりとりをとおしてハンジを展開する流れが作れないと推察した。

ハンジが展開しない2つ目の理由は、依頼者は、ユタにハンジを出してもらい、相談するような心配事が自分にあると思っていないことである。Sユタにどのくらいの予知能力があるかが見たいと思ひ、ハンジに反応しなかつたなどと事后面談で説明していたこともそのことを示唆している。また、悪霊から自分を守るためのお祓いの仕方を具体的にSユタが依頼者に助言しているが、それはまったく実行しなかつたことを事后面談で語っている。ハンジ場面の一つ一つについて、ユタは自分の語りを依頼者が理解していないとみて、一般的な対応であるが、「よく考えてみなさいね」「帰ってから、親に確かめてみなさいね」などと言って場面の次なる展開を図っている。これ以上ハンジが展開しない場合、ユタはよくこういうパターンをとるのである。やはり、まず、ユタと依頼者がハンジを展開するには、依頼者に解決したいという心配事や気がかりなことがある必要がある。また、ユタとやりとりするハンジの展開をとおして、これの解決を図りたいという思いがあることが要請される。こうした前提があつて、ユタの活用ができるというものである。

同事例におけるハンジ場面が展開しにくい3つ目の理由は、参与観察中であつた場の条件の影響である。ハンジ課題が結婚や付き合っている人などに関連することや、家族に関するこの場合、やはり、知人が同席していると、内面が知られたくないとの思いが働き、想像したことをことばで開示しにくいという点が考えられる。ましてや、実際、「一緒に暮らしてもいいよ、いい人がいたら」とのユタの振りに「あの人のことを言っているのかなと、一応想像する人がいましたが、否定しました」と答えている。依頼者が大学院生で参与観察者が指導に当たる教員であれば、知られたくない気持ちはなおさら強くなるであろう。

いずれにせよ、院生依頼者の事例を通して、①依頼者が心配事や気がかりなことを明確に意識していなかつたこと（相談する問題をかかえていなかつた）、②Sユタの振りや提示された課題に関する語りが依頼者において十分に理解されなかつたこと、③場の条件—ユタ以外の観察者に知られたくない事情の存在、などが依頼者に関して指摘できる。民間信仰職能者に興味や関心があつても、職能者であるユタと共有する伝統的な知識がなく、かつユタのハンジを手がかりにして問題解決を図ろうとする思いがない場合、双方のやり取りによるハンジの展開が難しくなることを本事例は示唆している。以上、依頼者の反応

については、ある程度予想されたことではあったが、結婚、就職、健康関係などについては、ハンジでもっと展開があるだろうと思っていた。この点についてはやはり観察の場の条件が影響したのではないかと思う。

## 6 終わりに代えて

本論の前半は、大橋（1998）の報告事例を中心に、ユタと依頼者が協働して作り上げるハンジの分析のための枠について論じた。これは、依頼者からすると、現在の悩みや不安を体現する「語り」である。また、この「語り」は、自分の過去に絡めたものであっても、今の状態をとおして過去を語っているので、今を語るのと同じである。しかも、内容は、われわれの日常における社会や文化「規範」とみなされることからの逸脱した出来事に関するものである。人びとにとってこうした逸脱がユタのハンジ場面で、「語り」としての文脈で取り込まれると、批判や糾弾ではなく、自他に許容され、理解を可能にするなどの意味をもたらしてくれるものと考えられている。

「語り」の内容のほとんどは、過去をとおして自分が今何を必要としているか、などについて現在の自分をどのように意味づけようとしているのか、もがいている様相を呈するものである。ユタと依頼者の織り成すハンジという「語り」は、依頼者の側からすると、祖先祭祀に係る規範からの逸脱や倫理に触れたことを物語の内容に入れ込み、登場人物に家族や、死者となった祖霊をも登場させ、逸脱や例外的なものを意味づけて許容し、修復する一連の装置として機能しているように思われる。

他方、後段で検討した県外出身の大学院生のハンジ事例は、ユタに対して個人的に関心があるとはいえ、ユタと共有する生活様式の違う世界にアンカーを下ろしているがゆえに、生活世界のことに関した課題について、ユタのハンジが活用できないことを示唆するものであった。この背景要因について加えて指摘すれば、精霊と交渉ができるという能力を信じる呪術的な観念や信念がユタに対してもてなかったという面であろう。とはいえ、今回は一例について検討したにすぎず、今後、事例を増やして検討を続けることが必要である。

本研究でのユタのハンジ場面における、ユタと依頼者のやりとり過程におけるハンジの展開の分析・検討で、これらを「語り」「物語」として捉え、「何があったか（体験事象）」、「当事者のこころの状態」、「登場人物」の構成にどのような筋書が入るのかを考察した。ハンジ過程において語られるこうした「語り」や「物語」は、さらに、①ユタ、②依頼者、③ユタと依頼者の相互作用、という3つの観点から分析を行うことが可能である。

今回、ユタと依頼者の相互作用の観点（③）からハンジの展開の分析を試みた。次の分析の展開は、ユタの側の視点（①）から、ユタが依頼者にどのような課題を振るのか、その種類などの領域やカテゴリーはどのような意味をもっているのかについて分析することである。その上で、これらの領域の範囲やその種類の数には、ユタの見えている、あるいは考えている社会がどういふもので、これがどのように反映されているのかを分析することもユタ理解を深めるためには欠くことのできない視点である。同時に、ユタがどのよう

な過程を通してこうした世界観や規範、さらに知識などを形成・修得していくのか、成巫過程と関連させて調査・分析を行う必要がある。加えて、依頼者に対するユタの共通した振り課題の分類メニューがあるのか、あるとすれば、これは何を意味するのかもユタを理解する重要な分析課題である。一方、ユタが依頼者に振っても依頼者が応えないことに対するユタの思いや理解の仕方もやはり、合わせて分析する必要があると思われる。

同様なアプローチで、依頼者の側からの調査・分析も必要である。ユタのヤーへ出向く人の心配事や気がかりなことなど、またこうした不安が日常生活のどのような脈絡で生じるのか、家族や親族関係のどのような役割関係、どのような交換関係（位牌や祖先祭祀の儀礼における）で生じるのかなどである。いずれにせよ、ユタと依頼者をめぐる研究課題は多様で多数あり、これを明らかにすることの意味について少し触れる。

ユタのハンジ過程の研究への関心は、フォーク・サイコロジー（Folk Psychology）をきっかけにしている。人々は、「文化を通して自分自身を完成し、仕上げるので、文化から独立した人間性というようなものは存在しない」（Clifford Geertz）、「人間は文化の表現である（Clyde Kluckhohn）」という視点から、社会行動を理解しようとする立場がフォークサイコロジーである（ジェローム・ブルーナー、1999、2002、2004）。確かに、共通する生活様式（文化）において生活する人々のもつ意味は、公共的であり、共有されるようになる。われわれが一つの生活様式で適応した生活ができるかどうかは、生活の場で意味が共有されているか、概念が共有されているかにかかっている。また、意味や解釈の違いに関して折衝するための談話モードも、共有されているかどうかにもかかっている。しかし、一方で、このように人の行動の指針として標準化されたものがあるとはいえ、人はこうした規範性から例外的な行動に出がちである。自分のおかした例外的行為を「弁解する」ために許容されている手段が文化にはあるとされる。それは、意味を公共化し、それによってわれわれがやっていることを再び正当化するような方法である。それぞれの文化におけるこれらの仕組みを理解することは、その文化に生きる人々が日常生活で現実的な問題と折り合いをつけながら、かつ思いを納めながらどのように生きているかについて、理解を深めることに繋がる。こうした人々の規範の上での例外行為や逸脱からの回復・修復装置をユタの機能であるとみなして、人々の「語り」「物語」を分析するフォークサイコロジーの方法論を用いて、その構造・機能について明らかにすることを今後も目指したい。

### 引用・参考文献

- 1 大橋英寿 1998 沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究 弘文堂
- 2 エイドリアン・ウエルズ 2006 心配、侵入思考、全般性不安障害：メタ認知と治療 デイビッド・A・クラーク 侵入思考—概念はどのように病理へと発展するのか 丹野義彦（監訳） 星和書店 Pp.153-194
- 3 饒平名健爾 1972 民間信仰 沖縄懸史第22巻 沖縄県 Pp.697-842

- 4 饒平名健爾 1986 「ユタ」と沖縄社会史 概説と研究、『沖縄社会研究』創刊号 Pp.40-41、沖縄社会学会
- 5 William P. Lebra 1966 OKINAWAN RELIGION Belief, Ritual, and Social Structure, UNIVERSITY OF HAWAII PRESS: 1974 沖縄の宗教と社会構造 崎原貢・崎原正子訳 弘文堂
- 6 マイヤー・フォーテス 1980 祖先崇拜の論理 田中真砂子 編訳 ペリカン社
- 7 ジェローム・ブルーナー 1999 意味の復権 (Acts of meaning) 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子訳 ミネルヴァ書房
- 8 ジェローム・ブルーナー 2002 ストーリーの心理学 法・文学・生を結ぶ (Making Stories) 岡本夏木・吉村啓子・添田久美子訳 ミネルヴァ書房
- 9 ジェローム・ブルーナー 2004 教育という文化 (The Culture of Education) 岡本夏木・池上貴美子・岡村佳子訳 岩波書店
- 10 アルフレッド・シュッツ 1980 文化人類学叢書 現象 学的社会学 (森川眞規樹・浜日出夫訳) 紀伊國屋書店
- 11 岡本夏木・山上雅子(編) 2000 意味の形成と発達—生涯発達心理学序説— ミネルヴァ書房
- 12 山内昌勝 2014 チジウガミー私の霊拝みの記録— ボーダーインク
- 13 山入端津由・井村弘子 2010 久米島におけるユタの巫業—民間職能者による依頼者支援と心理臨床面接との比較— 久米島調査報告書(2) (地域研究シリーズ No. 37) 沖縄国際大学 南島文化研究所 Pp.127-136
- 14 山入端津由・井村弘子 2011 民間職能者(ユタ)のハンジ場面分析の試み—ユタと依頼者のやり取り分析のための作業仮説— 沖縄国際大学人間福祉研究第8巻第1号 Pp.41-60 沖縄国際大学人間福祉学会